

木

KINO PRESS
NO.44

野

京都精華大学
KYOTO
SEIKA
UNIVERSITY

通

木野通信 第44号 2007年7月10日発行
京都精華大学広報部広報課
〒606-8588
京都市左京区岩倉木野町137
TEL. 075-702-5197

信

節目ということ — 京都精華大学四〇周年

学長◎ 島本 浣 SHIMAMOTO Kan

節目というよく使うことばがある。年齢が進むにつれ使用頻度が多くなることばでもある。書くまでもないことだが、もともとは「木材」や竹の節となっているところ」の意味である。それが人生の流れに採りいられることになった。木材では「節目のない良材」などというて節目はちょっとした邪魔者だが、人間には節目のない人生なんて考えられない。節目をつくることで、生きることを生きているともいえる。

たとえば、大学に入ることは、多くの親御さんにとって子供の節目だろうし、就職や結婚もそうた。そうした祝いごとだけでなく、病気や死も節目となる。それだけではない。いまでも陰陽道の考えが生活習慣に入り込んでいる日本では、その暦法のためだろうか、いろいろな節目が人生に設定されている。その代表は七五三、還暦、厄年といったものだろう。人生のめでたい年や不吉な年が設定され、祝ったり払いのけようとすることで生きている。

こうした節目があるのはなにも東洋だけでない。西洋にだって、お

そらく他の地域にだって存在する。というより、人間が時間を生きる存在であり、存在がけっして一様でない以上、節目という区切りは誰もが意識するものだと思う。

京都精華大学は来年、二〇〇八年度に四〇周年を迎える。それを祝うために記念事業を行おうとしている。「一〇〇周年記念」は大学や組織にとっての節目となるものだ。としたら、精華にとって四〇年とはどういう節目なのかは考えないといけないことだろう。

ぼくは精華人としての経験は十分ではないが、いまの職についてから、短期大学から出発した精華が、どのようにここまで発展してきたのか、その歩みのなかでどんな苦労があったのかを多くの先輩から聴いた。そんな話のなかで、多くの精華人が節目のたびに建学の精神というものを意識したこともわかった。当然のことだと思う。節目というのはそれまでを振り返る区切りとしての節だからである。「一〇〇周年」を祝うのは一種の原点へのオマージュでもあるからだ。

四〇周年も基本的には同じだと思っている。ただし、節目は振り返



[Safety of food Color Desk]
吉岡美世子 203D033

ることだけでなく、未来も志向している。未来への夢を祝うことでもあるのだ。原点を見つめ直しつつ、未来を指向する。言ってしまうは、これも当たり前のことだ。

精華の原点のひとつは、自由自治の理念から発する学際主義、国際主義、そして体験主義という三つの教育実践観だと思っている。おそらくこの教育観の実現をめざしてここまで歩んできたのだと思う。このイスマは四〇年近くたった現在でも有効だ。というより、四〇年たとうとしているいまこそ、かつて「理想」であったものが広く社会に開かれたかたちで実現可能になったと感じている。昨年から四学部体制、教育施設の整備、クムルス会議の開催、マンガミュージアム創設等々、こうした事実が語っているのは、精華が創立以来、求めてきた「理想」実現の環境が整ったということだろう。来年、祝いたいのは、これまでの四〇年という年月と、さらに五〇年目、一〇〇年目という未来への出発という節目に対してなのである。

1968年を訪ねて

京都精華大学は2008年、創立40周年を迎える。京都市の郊外、緑深い木野の地に生まれた、たった2学科200人あまりの小さな短期大学は、しかし、「自由自治」の理想を高く掲げ、徹底して民主的な新しい大学像を描いていた。学生の手に学問と自治を取

り戻すこと。教職員と学生が対等に議論し、ともに学ぶ場を創ること。1968年。政治・思想・社会・文化……あらゆる面で歴史を画するエポックとなったその年に、精華の歩みは始まった。節目となる来年を目前に、いま一度、原点の時代を訪ねてみよう。

1968年という時代

「1968年に自由であること、それは参加することだ。夢想は現実である。現実を欲すること、結構！ 欲することを現実化すること、もっと結構！」
精華の建学の理念をそのまま表したかのようなこの文言は、68年、パリ五月革命で学生たちが壁に書き連ねたアフォリズムの一節だ。大学の民主化要求に端を発したフランスの学生運動は、やがて労働者も加わり、国家に対して自由・平等・自治を求める1千万人規模のゼネストに発展する。世界中がダイナミックに動いた「政治の季節」だった。チェコスロヴァキアでは改革運動「プラハの春」が起こり、ベトナムではこの年1月のテト攻勢を境目に、アメリカの「正義」が地に墮ちて行った。ヒッピー・ムーブメントのうねりは、翌年のウッドストック・フェスティバルへつながってゆく。

変革の熱波は国内にも満ちていた。3月に東大安田講堂が占拠され、日大

では大学当局の巨額の使途不明金が発覚。これをきっかけに大規模な紛争へと発展する。川端康成がノーベル文学賞を受ける一方、三島由紀夫は「楯の会」を結成した。「少年マガジン」では『あしたのジョー』の連載が始まり、つげ義春は「ガロ」に『ねじ式』を発表した。フォーク・クルセイダーズの歌う『イムジン河』は政治的配慮により発売中止になった。井筒和幸監督の『パッチギ！』に、当時の京都の空気が描写されている。

そんな時代に最初の一步を刻んだ京都精華大学が「自由自治」を掲げる新しい大学を目指したのは、宿命だったといえるかもしれない。当初は、英語英文科と美術科からなる男女共学の「京都精華短期大学」だった。

初代学長が掲げた理念

「当時、僕は美大を卒業して間もないころ。高校・大学の先輩だった古富康夫先生に『美術系の新しい短大ができる

るから手伝わぬか』と誘われてね、それで開学へ向けた広報や受験生集めを担当することになったんです」
創立当初を知る数少ない現役教員の坪内成晃・テサイン学部長は振り返る。

「工事関係者との打ち合わせに建設現場に来てみたら、右も左も山しかなくて、休耕地の原野にポツンと小屋が建っているような感じ。ほんとうに世界一小さな大学なんだなあと実感しましたね」

ただ、規模の小ささゆえに、そこに集まった人材の個性と熱意、「何か新しいことが始まる」という高揚感を、はっきりと肌で感じ取ることができたという。洋画家で、行動美術協会の創立メンバーの伊谷賢蔵氏、英語教育の「達人」で、牧師でもあった柳島彦作氏。そして、初代学長を務めた岡本清一氏。同志社大学の元法学部長で、大学紛争では学生側の主張に理解を持って対応したりベラベラな政治学者だった。現在に至るまで受け継がれている精



1967年5月20日、京都精華短期大学校舎建設予定地での地鎮祭の様子。現在はたくさんの校舎が立ち並んでいるが当時は原野だった。

ゼロから自分たちの世界を

ない教授による教育は、無意味である。われわれの大学は新しい画布（キャンパス）のように、一切の因習的な過去から断絶している。そして教師も学生もすべて、まず人間として尊重され、自由と自治の精神の波うつ新しい大学を、これから創造していこうとしているのである」

この大学の理念のもとに、今日の『失われた大学教育』を、京都の地において回復することに、われわれは使命を感じている。このあたらしい大学創造の仕事を分担しようとする学生諸君！ 諸君の参加をわれわれは待っている」

こうした理念は、「自由自治」「国際主義」「凝集教育」「人間形成」の4つの柱にまとめられた。形骸化した学問の自由と大学の自治の回復を目指す熱い言葉に突き動かされるように、坪内氏は開学準備に奔走することになる。



第一回入学式。1968年4月1日、国立京都国際会館で行われた。立命館大学の末川博経校長からの祝辞は、新しい大学を作ろうという岡本清一の気概へのエールであった。

第一回の入学式は4月10日、国立京都国際会館で開かれた。学生総数203人、専任教職員は30数人。「辺境の地」に開かれた「世界一小さい大学」に入学した学生たちは、何を感じていたのだろうか。美術科1期生で、現在は大学の専務理事を務める赤坂博氏が語る。

「美大の志望者数に比べ、当時は学校数が全然足りず、何年も浪人している学生も珍しくなかった。とにかく絵を描く場に飢えていた私たちは、やっと自分たちの居場所ができたという喜びでいっぱいでした。通学の不便さも苦にならなかった。むしろ、自分たちだけの世界を創っていくには、街から離れていることや新設校だったことがプラスになった面が大きいかもしれませぬ」

岡本学長が掲げた建学の理念を、学生は学生の立場で体現しようとしていた。そのよき相談役であり、パートナーとなったのが、若い教職員の面々だった。
「多くの先生方は20〜30代と若く、私たちに兄のような存在。非常に熱心に接してくれました。夜遅くまで車座で議論したり、時には一緒にデモに出かけたり。そんな行動や態度を見ることが、岡本先生の言葉をほんとうに理解できるようになっていったんではしゃうね」
最も若い教職員だった坪内教授もこ

う振り返る。「真夏に校舎を冷やすため、バラックの屋根に放水したり、野外でパーベキューをしたり……何でもいから、とにかく学生を学校にさせようと思っていました。人が集まればエネルギーが生まれるんですから」。

9月。学生たちは団結を呼び掛け、全員参加で自治会を結成。赤坂氏は書記長となった。11月には、第一回の学園祭「木野祭」を開いた。ここでも実行委員長を務めた赤坂氏は「ゼロからの出発」をテーマに、仮装パレードで「精華短大」をアピールしながら、出町柳から河原町通、田山公園までを歩いた。学校に戻って来ると、現在の明窓館あたりになるグラウンドでキャンファイヤー。夜通し酒を飲み、歌い、議論した。

「ここは自分たちの大学なんだ、一緒に創っていくんだ、という意識がみんな強かったですよね。精華の学生であることを誇りに思っていた。だから、当時の卒業生は良くも悪くも思い入れが強過ぎるところがある（笑）」

精華の「68年の思想」

「大学入らしくない、いわば『はみ出し者』みたいな人ばかり。でも、みんな気骨や信念があった。そんな大学を理解し、受け入れてくれた地域の存在も大きかったですね」と坪内氏。

「学生と教職員の関係の近さ。それが何より精華の価値だと、だれもが感じていたし、いまもその雰囲気は受け継がれていると思います」と赤坂氏。

権威の衣をまとった既存の大学とは異なる「自分たちの世界」を木野の地に築く。教職員も学生も、ともに理想に燃えたあの時代があったからこそ京都精華大学の40年はある。2人の証言はそう語っているように思える。

大学や学生を中心とした変革の年に、やはり大転換を迎えたフランスの現代思想界には「68年の思想」という象徴的な言葉があるという。京都精華大学の「68年の思想」も、大学のあり方を指し示す羅針盤として、いまも生き続けている。



叡山電鉄の木野駅で、電車から降りてくる学生たち。京都精華大前駅ができるのは約20年後の1989年。

NEWS

新校舎「対峰館」完成

設備も充実、本学最大の実習棟

2005年5月下旬より着工、2006年春に第一期工事を完了後、増築を進めてきた新実習棟「対峰館」が、2007年3月に完成した。これにより、予定していた全校舎が完成したことになる。

対峰館は、5階建ての鉄筋コンクリート構造。延床面積は1万平方メートルを超えており、本学最大の実習棟として、芸術学部・デザイン学部・マンガ学部の授業に使われている。校舎内には、全国でも最高級の設備が整った工房をはじめ、CGルーム、暗室、写真スタジオ。アニメーションのスト

ップモーシヨンスタジオや、学年を越えた授業を展開できるビジュアルデザインの大実習室など、多彩な教室が設けられており、各コースの授業を施設面から支援している。4・5階には広々としたギャラリースペースも併設され、作品を展示することも可能だ。また、1階入り口そばの開放的な空間に就職課の事務室を設置し、学生たちが気軽に訪れることができるように配慮している。



▲5号館を背に見た対峰館校舎

中国の文化産業交易会に出展

アニメ・マンガがテーマのイベントに本学とマンガミュージアムが参加

5月17日から20日までの4日間にわたって中国シンセンで開催された「国際文化産業交易会」に、本学と京都国際マンガミュージアムが出展し、日本のマンガ文化を紹介した。国際文化産業交易会は、中国では最大規模の文化産業の展示会で、第三回となる今回はアニメーションやマンガがテーマ。本学のブースには、マンガ制作実演コーナーや、マンガ喫茶のコーナーが用意され、常に人だかりがあるほど人気だった。また、2日目に開催された、本学マンガ学部教員の前田氏の講演も大変好評だった。

た。地元メディアからの取材も相次ぎ、テレビ局、新聞・雑誌社のほか、ラジオ放送に生出演も。記者やアニメ関係者から「中国のアニメはどうか」との質問をたびたび受けた。一日平均1200名と、多くの来場者を迎えた。中国でのマンガやアニメーション分野への関心の高さがうかがえるイベントとなった。



NEWS

情報館リニューアル

「学習環境の改善」工事が完了

京都精華大学情報館では、「学習環境の改善」「情報発信機能の拡充」をテーマに、今春から3年間を目標として、館内のレイアウトや設備を刷新している。その第一期リニューアル工事が、2007年2月に完了し、本年度より使用できるようになった。

学習環境の改善のために行われた今回の工事では、まず、電源コンセントやデスクランプが標準装備された、個人学習用キャリブデスクを3階に導入。今まで2階と地下1階にあったコミックコーナーは、地下1階に統合され、単行本に代わってコミック雑誌の最新号が揃えられるようになった。また、3階の畳コーナーが撤廃され、学生や情報館が主催する展覧会などにも活用できるようになった。

設けられている。他にも、静かな環境で勉強したい利用者や、数人で談話しながら勉強したい利用者、双方のニーズをみたすためのレイアウト変更を引き続き進めていく方針だ。2階フロアをコミュニケーション・スペースとして、携帯電話での通話なども可能に。それ以外の場所は私語禁止環境にするなど、利用形態別のすみ分けをはかる。

従来にも増して多くの方々に喜んでもらえることを目指し、環境を改善していく、新しい情報館に期待していただきたい。



舞鶴市と連携交流協定を締結

学生の学びのフィールドとしても連携交流を強化

京都精華大学と舞鶴市は、平成13年度から舞鶴自然文化園の有効活用事業を中心に交流が始まり、これまで数々の実績を重ねてきた。2007年4月27日に舞鶴市役所にて連携交流協定締結式が行われた。今回の連携交流協定により、今後は学生の学びのフィールドとしても舞鶴市との連携交流を強化していくことが合意された。



▲握手を交わす舞鶴市長 斎藤彰氏と本学片桐理事長

NEWS

日本語リテラシー」特色GP採択記念講演会

日本語の読み書きと大学教育の改革が開催

人文学部の1年生全員が受講する「日本語リテラシー」が、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択されたのを記念した講演会が、3月から5回連続で開催された。テーマは「日本語の読み書きと大学教育の改革」。第一線で活躍する5人の講師を招き、「ものを書く生き方とは」「読み書きが人生にどんな影響を与えたか」などを語ってもらった。5月19日に開かれた最終回には、作家の重松清氏が登壇。学生や一般市民ら150人が耳を傾けた。

「僕は……」と書かされる。その瞬間、どこかウソになる。標準語はスタンダードであり、それはそれで大切だけれど、だからといって、方言が劣っているとか間違っているというのではない。僕は東京に住んで26年になるいまでも、とっさの感情を表すときは方言が出るし、実家の父親に話しかけるときは意識的に方言を使う。その方が自然だし、よりよく伝わるからです」

言葉を「正否」だけで判断すると言葉がやせると、言葉がやせると、思いまでやせしてしまうと、重松氏は指摘する。

重松氏の講演は、旧来の国語教育的な「正しい日本語」に疑問を投げかけるところから始まった。多くの単語を知っていて、難しい漢字が使えて、句読点を打つ位置が完璧で……といったことよりも大切なことがある。言葉はあくまで、「書く・話す人」と「読む・聞く人」の間をつなぐ道具だと強調した。

「日本語としてはめちゃくちゃでも、この人が話すとなんだか面白いとか、みんなが盛り上がるという人がいるでしょう。日本語の読み書きとは、言い換えれば、人の心の読み書き。『文は人なり』といわれるように、言葉は言葉だけで成り立っているわけではない」



▲聴講者を前に「正否」ではない日本語の魅力を語る重松氏

要は、その言葉や文章でだれに何を伝えたいかだ——と重松氏。思いをより深く伝える例として、方言を挙げた。

「物への考え方が大雑把になり、○か×かの発想しかできなくなる。微妙な心理やアヤが表せない。言葉は、重松氏は宅配便にたとえる。言葉は箱、思いが中身、それをどこに運ぶかという伝票がある。だが、だれに向けて発しているのか。「顔」の見えないメッセージは届かない、と。街なかや学校の標語、印刷で済ませた年賀状、そして、インターネット上の匿名の書き込み。インターネットは、だれが発しているかわからないこの怖さもほらむ。メッセージよりも、イメージやムードが伝播していくからだ。『伝えたい思いと相手があり、それを受けとめる人がいるのは幸せなこと。それでも、100%は伝わらないもの。どんなふうに伝えようか、もっと深く伝える言葉はないだろうか。自分に合った表現を見つけた意味でも本を読んではいい』

過去4回の講演

第1回は、ノンフィクション作家・エッセイストの久田恵氏が登壇。話すことが苦手だった子供のころにコミュニケーション手段として見つけた「書くこと」を通じて独自の考え方が形成され、人生の指針となっていた体験を話した。

第2回は、フリージャーナリストの斎藤貴男氏。反骨精神の原点として、シベリアに抑留され、鉄くずを扱う仕事をしてきた父親を見て育った経験を話した。「規制緩和が強者の論理だと気付いたのは、そうした生い立ちからかもしれない」と話した。

第3回の山田スニーさんは、文章技法の著書も数多い一方、コミュニケーションインストラクターとして活動する。「通じ合う力」をテーマに、2人ひと組のインタビュアーや5人が互いに自己紹介やスピーチを行うワークショップ形式で講義を進めた。

第4回は、藤田英典・国際基督教大学教授。大学紛争の真っ只中、背伸びして古今東西の名著を読み、議論を繰り返しながら、思考と試行錯誤を重ねた時期を振り返った。そのうえで、他者や社会を理解し、批判的・自省的に生きるために、読み書きは極めて重要だと話した。



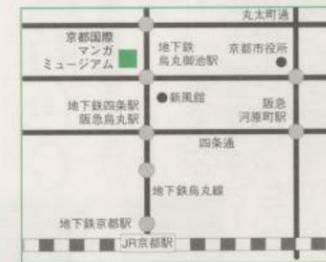
Facilities
outside the
school

学外施設

京都国際マンガミュージアム

日本のマンガ・アニメーションは、いまや、ひとつの文化として確立され、その影響を受けた新たな表現の潮流が、海外でも次々と生まれている。日本の重要な「知的財産」ともいえる作品や関係資料を収集・展示するとともに、マンガ文化の体系的な研究や専門家の育成の拠点として、昨年11月にオープンしたのが「京都国際マンガミュージアム」だ。本学が京都市と共同で、龍池小学校の廃跡跡を利用したミュージアムは、公民協働の地域文化施設としても注目されている。

館内は一般公開のギャラリーゾーン、研究ゾーン、資料収蔵ゾーンなどで構成。蔵書は、明治時代の雑誌や戦後の資本から、現代の人気作品や海外の名作まで約20万点に上る。これら資料をもとにした調査研究の成果は、展示という形で発表し公開され、マンガに関するワークショップやセミナーなども開かれている。来年は、「国際マンガサミット」京都開催の年。マンガ文化の発信拠点としてますます期待が高まっている。



京都市中京区烏丸御池上ル(元龍池小学校)
10:00~20:00 水曜・年末年始休館
7月20日から8月27日までは、創刊30周年を迎えた「コロコロコミック」の企画展が開かれる。

表現研究機構

「表現を通して現代文化(ポピュラーカルチャー)を考える」と活動理念を掲げているのが、2001年に誕生した「表現研究機構」だ。人文学部を持つ芸術系大学としての特性を生かし、人文学的な視点から、多様化・複雑化するポピュラーカルチャーの社会的背景、その社会的訴求力や意義について考えることを目的としている。

文学・マンガ・映像の3研究プロジェクトが、その開設から独自の歩みを見せてきた5年間の成果を踏まえ、



京都市左京区比叡山一本杉 叡山閣
叡山閣はもともと「比叡山ホテル」の和風別館として1964年に建設。比叡山の中心にあり、京都・大津が一望できる。

学生や卒業生、教員たちの作品発表の場、さまざまな分野の研究を深める場、さらに情報発信の場として、本学は充実した学外施設を備えている。そのなかから4施設を紹介する。

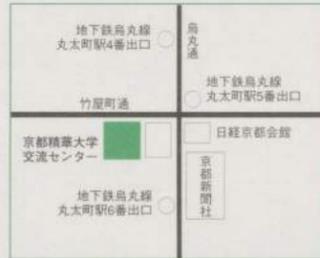
環境ソリューション研究機構

2004年に開設された「環境ソリューション研究機構」の目的は大きく2つ。地球や地域における快適な環境をつくるための問題解決方法を提案・実現すること、環境や資源の南北格差を改善する方法論を提案・実現すること。この目的に沿って3つの研究所が設置されている。

「環境ビジネス研究所」では、宮津市文殊地区のまちづくりプロジェクトなどを実施。「環境マネジメント研究所」は、ISO14001の認証取得やCSR(企業の社会的責任)

に取り組む中小企業のための講座やコンサルティングを行ってきた。「環境建築研究所」は、舞鶴市と連携し、舞鶴自然文化園や廃校になった旧小学校の有効活用の提案、竹を利用したエコ・デザイン製品の制作などに取り組んだ。

5年目を迎える来年までに、3研究所を統合するよう総合的研究を計画。高校生らを対象に環境学習のワークショップを行なう「ECOSOWER」事業も動き出した。



京都市中京区竹屋町通烏丸西入亀屋町151 京都精華大学 交流センター
交流スペースや資料コーナーは一般の人も利用できる。

shin-bi

「shin-bi(シンビ)」は、本学が培ってきた資源・才能をベースに、「新しい美」「新しいビジョン」をプレゼンテーションする学外アートのベース。2004年12月、四条烏丸のココン烏丸3Fにオープン。ショップとギャラリー、ワークショップスペース「Studio KINO」からなる。ショップでは、プロとして活躍する本学卒業生によるアート・デザイングッズや書籍などを販売し、ギャラリーでは、作家や卒業生、在学生の優秀作品の展覧会を開催。ワークショップスペースを活用したイベ

ントの企画やプロデュース、上映会なども積極的に手掛け、京都烏丸の新たなアートの発信基地として注目を集めている。

ワークショップの一貫したテーマは「くらす」。「class」と「暮らし」の2つの意味を含んでおり、生活の中に芸術や新しい価値観を提案するための実験と実践の場となっている。唐紙や篆刻といった伝統的表現から、フェルトやガラスの作品づくり、ボディ・エクササイズ、子供や親子向けの講座まで、幅広いメニューで人気を集めている。



京都市下京区烏丸通四條下ル水銀屋町620 COCON KARASUMA 3F 11:00~21:00
革小物からステージ演出やディスプレイも手掛ける姉弟ユニット「atat」の作品展を開催中。7月31日まで。

アセンブリーアワー講演会

1968年の大学創立以来続いている「アセンブリーアワー講演会」では、「旬のテーマ」「旬の人」をコンセプトに、時代の核心に迫る講演を展開しています。作家、マンガ家、デザイナー、映画監督、演出家、研究者とジャンルを問わず、「今」という時代をつくる各界の第一人者による刺激に満ちた話は、本学学生たちの大きな糧となってきました。申し込み不要・参加無料で、学生たちはもちろん、本学関係者以外でも参加可能。門戸の開かれた講演会は、社会へ発信し、社会と結びつく取り組みでもあります。

マンガ家の浦沢直樹氏、映画監督の犬童一心氏、作家の宮崎学氏が登場した昨年度に続き、今年度は映画監督・ビジュアルクリエイターのマイケル・アリアス氏、『暮しの手帖』編集長の松浦弥太郎氏、演出振付家・ダンサーの金森稜氏ら、興味深い顔ぶれが既に講演を行っています。講師たちの生きる現場の息吹を伝え、「仕事とは」「表現とは」「現代とは」、そして「進むべき道とは」を考えさせる貴重な

『KINO』好評発刊中

京都精華大学情報館が編集・発行するワンテーママガジン『KINO』の第4号が好評発売中です。第4号のテーマは「今、時代劇がおもしろい!」。トップインタビュは、異色時代劇マンガ『へうげもの』で知られるマンガ家・山田芳裕氏。同作品で描かれている、刺客者（へうげもの）の美意識に関してなどを中心にお話を聞かせていただきました。また、山口貴由氏、小山ゆう氏、沙村広明氏らのマンガ家陣もロングインタビューで登場。「売れるには理由がある! 井上雄彦研究」では、井上雄彦論

▲渡米や古書店経験で感じたことを語ってくれた松浦弥太郎氏



な場です。

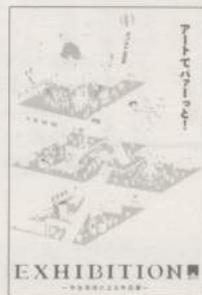
7月12日には、本学人文学部客員教授であり、動物行動学者の日高敏隆氏が「今、環境を考えるとどういふことか」と題して講演を行う予定です。

※2007年度後期の講演会スケジュールは8月に公開いたします。パンフレットの配布も8月を予定しております。詳細は本学ウェブサイトでご確認ください。



「エキシビジョン」展開催

自らの表現で何かを伝えていこうとする学生たちへの表現の場の提案として、また学生自身が社会へむけ踏み出す機会となることを目標として、2005年に発足された学生主催プロジェクトが「エキシビジョン」展です。今年も8月3、4、5日のオープンキャンパスに合わせ、学内で作品展やイベントが開催されます。今回のテーマは「百貨店」。各分野の多種多様な作品がいっせいに集まり、今までにない百貨店がオープンします。ぜひ足を運んでみてください。



にはじまり、メガヒット時代劇マンガ『バカボン』の変遷と技術論、原作との相違など、作者と作品の魅力および成功の要因についてを多角的に検証。その他、〈剣豪編〉〈忍者編〉〈戦乱編〉〈その他編〉の4つの分類から、新旧の名作を網羅した時代劇マンガ名作レビュー84も掲載で、読みごたえのある1冊となっています。

『KINO』は全国有名書店で発売中。購読に関する問い合わせは河出書房新社まで。



2007年度 大学スケジュール

- ・ 7月23日〜28日 前期定期試験
 - ・ 7月30日〜 夏期休暇
 - ・ 9月11日 秋季入卒式
 - ・ 9月14日〜 後期授業開始
 - ・ 11月1日〜3日 木野祭
 - ・ 12月24日〜 冬期休暇
 - ・ 1月7日〜 授業再開
 - ・ 1月21日〜26日 後期定期試験
 - ・ 1月30日〜2月3日 卒業制作展
 - ・ 3月20日 卒業式
- (6月現在予定)

施設整備および教育研究事業充実 に関する募金についてお願い

施設の充実、教育・研究の発展にかかる経費のご寄付ご協力をお願いいたします。寄付金は一口五万円からとなっています。詳細につきましては「募金要項」をお取り寄せてください。この寄付金につきましては、文部科学省から「特定公益増進法人であることの証明書」の交付を受けていますので、所得から税金控除を受けることができます。詳細のお問合せや募金要項のお取り寄せは、京都精華大学企画室(075-702-5201)までお願いいたします。